

# 英語学習・指導に関するビリーフの修正

——横断法による「英語科教育法Ⅰ」の授業効果の検証——<sup>1</sup>

島 田 勝 正

## 1. はじめに

### 1.1 「英語科教育法Ⅰ」の問題点

大学において教職課程を履修し、英語教員を志す学生は、必ず「英語科教育法」を受講しなければならない。本学においても、毎年相当数の学生が受講するが、「英語科教育法Ⅰ」の受講生には次のような問題点がみられる。まず、英語学習歴の貧困さが問題となる。「英語科教育法Ⅰ」は、カリキュラム上、2年次から受講できるので、受講生の英語学習経験は8年に満たない。次に受講生が描く英語指導のモデルの貧困さが挙げられる。彼らが中学校・高等学校で教育を受けた数名の教師の指導方法が、モデルとして模倣の対象となり、そのイメージから容易に脱却できない。

したがって、大学における英語教員養成の責務は、英語学習歴と英語指導モデルの貧困さに起因する英語学習・指導に関する望ましくないビリーフから解放し、英語指導のモデルを修正・再構築させることにあると考える。教員の学習・指導に対する態度が指導方法を決定するからである。そのためには、学生がビリーフを修正できるように、望ましい英語授業のあり方を自己評価、自己点検するための視点、観点を提供することが必要である。その作業は英語授業の原理・原則を構築することでもある（島田、1996；2002a；2002b）。

## 1.2 先行研究

本節では、筆者による英語学習・指導におけるビリーフ修正に関する一連の研究をレビューし、本研究の位置づけと意義を明らかにする。

島田（1996）は、1996年度の「英語科教育法」受講生43名を対象に、37項目から成るアンケートを受講開始前の4月と第二言語習得に関する授業が終了した6月に実施し、各項目の平均点を比較した。この調査で観察されたビリーフ変化は、以下のようにまとめることができる。

- （1）言語学習は模倣によるものではない。
- （2）学習者の文法創造により言語発達が進む。
- （3）生徒の間違ひは迅速に訂正する必要はない。
- （4）人間には生得的な言語習得能力がある。
- （5）母語と外国語、大人と子供の習得過程に類似性がある。
- （6）ある段階に到達しないと習得できない文法項目がある。
- （7）誤りの原因は母語からの負の転移である。

つづいて、島田（2002a）は、英語学習と英語指導に関する共時的な相互関連を調べるために、学習に関する31項目、指導に関する31項目、計62項目から成るアンケートを2001年度「英語科教育法Ⅰ」受講生27名に実施した。そして、学習に関する31項目、指導に関する31項目間で有意な相関がある70項目ペアから、両者の関連の説明がつく（望ましい学習ビリーフが望ましい指導ビリーフに影響を与えているか、または、望ましくない学習ビリーフが望ましくない指導ビリーフに影響を与えている）16の項目ペアを特定した。英語学習と英語指導とに相関があるとされるビリーフは、以下のようにまとめることができる。

- （1）誤りの訂正に関するビリーフ
- （2）言語習得過程に関するビリーフ
- （3）文法指導の明示性に関するビリーフ
- （4）発達段階に関するビリーフ
- （5）テストに関するビリーフ

(6) コミュニケーションに関するビリーフ

(7) 和訳／英訳に関するビリーフ

さらに、島田 (2002b) は、どんなビリーフがどのように修正されたかを調べるために、2001年度「英語科教育法Ⅰ」受講生22名が提出した内省レポートを分析し、その過程を Tillema (1998) および Cabaroğlu et al. (2000) に基づいて分類した。この調査で観察されたビリーフ修正の項目は、以下のようによまとめることができる。

(1) 言語習得過程

(2) 言語知識の種類

(3) 誤りの訂正

(4) 文法指導

(5) 言語使用

(6) 背景知識の活性化

(7) テスト

また、ビリーフの修正過程は深化、否定、追加が顕著であった。

## 2. 研究方法

### 2.1 研究目的

本研究の目的は、「英語科教育法Ⅰ」の授業を通して、どんなビリーフが修正されるかという点に関して、受講前の学生と受講後の学生という異なる集団のビリーフの相違点を、横断的に、かつ量的に調査することである。特記すべきは、調査対象を受講前と受講後の異なる2つの集団としたことであり、これが一連の先行研究と異なる点である。また、本研究は、前述した「英語学習・指導に関する望ましくないビリーフから解放し、英語指導のモデルを修正・再構築させることにある」とする「英語科教育法Ⅰ」の授業目的がどの程度達成されたかという授業評価でもある。

## 2.2 被験者

調査対象は、私立大学文学部の学生で、2003年度「英語科教育法Ⅰ」受講生35名および2002年度に「英語科教育法Ⅰ」を履修・単位修得し、継続して「英語科教育法Ⅱ」を履修している受講生15名、計50名である。<sup>2</sup>

## 2.3 ビリーフテスト

「ビリーフテスト」は、英語学習・指導に関する文章記述に対して、その同意度を5段階尺度法で答えさせるアンケート形式で、75項目から構成されている（島田2002b改訂版）。回答方式はマークシートを使用した。

## 2.4 分析方法

前述した合計50名の受講生に対して、2003年4月に「ビリーフテスト」を実施した。75項目すべてに関して、2群の平均点と標準偏差を算出した。t検定（両側検定10%）により、両群の平均点に有意差がある項目を特定した。

# 3. 結果と考察

## 3.1 結果

両群間のテスト項目に有意な差が観察され、かつ、授業効果があったと解釈できる項目は全部で27項目で、授業で扱った（1）言語習得と文法指導（13項目）、（2）コミュニケーションの指導（3項目）、（3）4技能の指導（3項目）、（4）授業の立案と評価（8項目）のすべての領域に観察された（表1）。以下に各領域で有意差が観察され、授業効果があったと解釈できる項目を列挙する。<sup>3</sup>

### （1）言語習得と文法指導（13項目）

1. 英語は暗記科目である。
2. 親は子供の誤りを訂正する。
4. 生徒はすべて同じ誤りをする。
7. 英語学習は他の教科の学習とは異なる。

英語学習・指導に関するピリーの修正

表 1：2 群の平均点の比較

Cat.	Unit	No		1M	1SD	2M	2SD	DIFF	2-tail
3	9	43	リスニング指導ではまずテープを聞かせるべきである。	3.80	1.05	1.40	1.06	2.40	***
1,2,3	5,8,12	28	誤りはすべて訂正すべきである。	3.66	1.19	1.80	1.15	1.86	***
4	16	71	テストの点数が上がった生徒は努力した生徒である。	3.66	1.00	2.60	1.24	1.06	**
1	5	26	生徒の誤りは教師が訂正すべきである。	3.63	0.88	2.67	1.29	0.96	**
3	11	50	内容理解の問の答えは本文の中にある。	3.54	0.92	2.60	1.50	0.94	*
1	1,4	1	英語は暗記科目である。	3.14	1.00	2.20	1.01	1.94	**
1,4	1,13	58	知識は教師が与えるものである。	2.69	1.23	1.80	0.77	0.89	*
3	9	45	英語を聞くときは文字を見せるべきでない。	3.40	1.19	2.53	0.92	0.87	**
1	3	18	話し言葉よりも書き言葉の方が誤りが多い。	2.74	1.15	1.87	1.19	0.87	*
2	7	34	表現したい構文が強い浮かばないとコミュニケーションは維持できない。	2.49	1.34	1.67	0.82	0.82	**
4	16	74	10点を取った生徒は9点を取った生徒よりも実力がある。	2.20	1.02	1.40	0.51	0.80	**
4	13	62	授業案は毎回あらためて書く必要はない。	1.97	0.89	1.20	0.41	0.77	***
2,4	7,13	60	授業案を作成するときは、まずどのように教えるかを考えるべきである。	3.74	1.17	3.00	1.41	0.74	+
1	4	25	生徒は文法規則を暗記すべきである。	3.23	1.03	2.53	0.92	0.70	*
1	2	16	複雑な言語構造の前に単純な構造を教えるべきである。	4.69	0.63	4.00	0.93	0.69	**
4	17	63	授業を観察するときは教師の言動に焦点を当てればよい。	2.20	0.80	1.53	0.74	0.67	**
1	1,5	2	親は子供の誤りを訂正する。	3.77	0.97	3.13	1.30	0.64	+
4	13	61	授業案には予定された教師の言動を書けばよい。	2.03	0.82	1.40	0.51	0.63	**
3	9	42	内容理解のための問いは本文を聞いた後で行なうべきである。	3.63	1.00	3.00	1.41	0.63	+
1	5	27	誤りはできるだけ早く訂正すべきである。	4.46	0.82	3.87	1.36	0.59	
2	6	33	単語や文法規則を知らないと、コミュニケーションはできない。	2.74	1.31	2.20	1.21	0.54	
4	14	66	生徒はテスト作成者が意図したように解答する。	2.71	1.18	2.20	1.08	0.51	
1	4	21	言語は反復により習得される。	4.63	0.69	4.13	0.64	0.50	*
1	2	10	教科書は、頁の順にしたがって教えるべきである。	2.29	1.13	1.80	0.86	0.49	
3	12	55	作文は日本語を英語に訳す作業である。	2.80	1.08	2.33	0.82	0.47	
4	13	56	生徒は教えたことはすべて理解している。	1.63	0.77	1.20	0.41	0.43	*
3	11	48	読解とは英語を日本語に訳すことである。	1.94	1.03	1.60	0.63	0.34	
2	8	37	言語学習の後に言語使用が来る。	2.94	1.14	2.60	0.99	0.34	
4	15	69	テスト項目の良し悪しは生徒の学力とは関連しない。	2.97	1.15	2.64	1.34	0.33	
4	13,17	59	授業の主役は教師である。	1.40	0.74	1.07	0.26	0.33	*

4	14	67	テストには授業で扱ったことを出題すべきである。	3.80	1.13	3.47	1.13	0.33	
2,4	7,10	35	1つの内容を言い表すために1つの表現形式がある。	1.71	0.97	1.40	0.74	0.31	
2,3	8,10	41	英語を話す練習では話す必然性がなくても仕方がない。	2.23	1.00	1.93	0.96	0.30	
2	6	32	読解や作文は、コミュニケーションではない。	3.23	1.26	2.93	1.16	0.30	
1,2	1,8	9	英語学習に反復は必要不可欠である。	4.94	0.24	4.67	0.49	0.27	+
1	4	22	教師は明示的に文法規則を教えるべきである。	3.63	1.00	3.40	0.99	0.23	
4	13	57	生徒は教師が教えたように学習する。	2.49	1.20	2.27	1.22	0.22	
1	1	6	英語は模倣によって学習される。	3.54	0.92	3.33	1.40	0.21	
4	16	75	平均点の高いクラスがよいクラスである。	1.86	0.91	1.67	0.62	0.19	
3	9	44	すべての単語が聞き取れないとその話者の言いたいことは分からない。	1.59	1.02	1.40	0.63	0.19	
4	16	70	テストは常に100点満点であるべきだ。	2.32	1.27	2.13	1.13	0.19	
4	17	64	授業は教室の後ろに立って観察するのがよい。	2.91	1.12	2.73	1.22	0.18	
3	9	46	英語を聞くときは映像を見せるべきではない。	2.09	0.85	1.93	0.88	0.16	
3	11	53	全文を日本語に訳さないと内容はつかめない。	1.49	0.56	1.33	0.62	0.16	
1	3	20	文型練習は会話には役に立たない。	2.54	1.04	2.40	1.12	0.14	
3	11	49	全文を訳す必要がある。	1.60	0.85	1.47	0.64	0.13	
1	2	12	すべての生徒が同じ過程をたどって文法を習得する。	1.97	1.10	1.87	0.83	0.10	
1	2	14	生徒の発達段階は文法習得には関与しない。	2.57	1.07	2.47	1.19	0.10	
1	4	23	教師は文法用語を教えるべきである。	3.06	1.08	3.00	1.00	0.06	
2	6,7	30	文法能力さえあれば、円滑なコミュニケーションができる。	1.71	0.86	1.67	0.72	0.04	
2	8	40	コミュニケーション重視の教科書を使えば、授業はコミュニケーションになる。	3.31	0.96	3.27	1.17	0.04	
1	2	11	文法の理解と表現は区別しなくてもよい。	2.31	0.93	2.27	0.80	0.04	
4	14	68	筆記テストですべての能力を測定できる。	1.29	0.52	1.27	0.46	0.02	
2,3	8,10	39	英語学習が単調になるのは仕方がない。	2.14	0.91	2.13	1.06	0.01	
1	1,5	5	生徒は英語の母語話者の子供と同じ誤りをする。	1.94	1.06	1.93	0.80	0.01	
4	16	72	成績の順位は総合（合計）点で決めるべきである。	3.34	1.26	3.33	1.05	0.01	
1	1,3	8	英語学習の過程は英語を母語として習得する過程とは異なる。	3.80	1.26	3.80	1.21	0.00	
1	2	15	生徒は次の項目に移る前にその例題練習をすべきである。	4.17	0.82	4.20	0.68	-0.03	
2	6,7	29	文法規則を知っていても、その言語を使えることにはならない。	4.43	0.92	4.47	0.52	-0.04	
2	8	38	文型練習をしてから言語活動に移るべきである。	2.69	1.08	2.73	1.22	-0.04	
2,3	6,10	31	英語学習では、話す必然性はなくともよい。	1.14	0.69	1.20	0.41	-0.06	

英語学習・指導に関するピリーフの修正

4	13,14	65	テストの目的は生徒の理解度を測定することにある。	4.20	0.68	4.33	0.62	-0.13	
3	11	52	文法説明と内容理解は別々に取り扱うべきである。	2.71	0.93	2.93	1.10	-0.22	
3	11	51	内容理解の問いの答えは一つでなければならない。	1.86	0.94	2.13	1.46	-0.27	
1	3	17	生徒はいつも同じ誤りをする。	2.46	1.27	2.73	1.10	-0.27	
1,3	2,10	47	教科書に手を加えてはならない。	1.57	0.65	1.87	1.06	-0.30	
2	8	36	言語学習と言語使用は別である。	3.14	1.17	3.47	1.06	-0.33	
2	3	19	文法規則は知っているのに、会話になると間違える。	4.26	0.82	4.67	0.49	-0.41	+
1	2	13	大人も子供も学習者は同じ過程をたどって文法を習得する。	2.09	0.96	2.53	1.06	-0.44	+
1	1,5	4	生徒はすべて同じ誤りをする。	1.54	0.95	2.13	1.13	-0.59	+
3	12	54	作文では文法的正確さを重視すべきである。	2.89	1.12	3.53	1.25	-0.64	+
1	4	24	英語の文法は日本語と対比させて教えるべきである。	2.80	1.08	3.47	1.19	-0.67	+
1	1	7	英語学習は他の教科の学習とは異なる。	3.31	1.28	4.13	0.83	-0.82	**
4	16	73	英語力は4技能の合計点である。	3.34	1.00	4.21	0.89	-0.87	**
1	1,5	3	生徒の誤りは日本語の影響による。	2.74	1.07	4.33	0.62	-1.59	**

\*\*\*p<0.001；\*\*p<0.01；\*p<0.05；+p<0.10

9. 英語学習に反復は必要不可欠である。

13. 大人も子供も学習者は同じ過程をたどって文法を習得する。

16. 複雑な言語構造の前に単純な構造を教えるべきである。

18. 話し言葉よりも書き言葉の方が誤りが多い。

21. 言語は反復により習得される。

24. 英語の文法は日本語と対比させて教えるべきである。

25. 生徒は文法規則を暗記すべきである。

26. 生徒の誤りは教師が訂正すべきである。

28. 誤りはすべて訂正すべきである。

(2) コミュニケーションの指導 (3 項目)

19. 文法規則は知っているのに、会話になると間違える。

34. 表現したい構文が思い浮かばないとコミュニケーションは維持できない。

60. 授業案を作成するときはまずどのように教えるべきかを考えるべきである。

(3) 4 技能の指導 (3 項目)

42. 内容理解のための問いは本文を聞いた後で行うべきである。

43. リスニング指導ではまずテープを聞かせるべきである。

50. 内容理解の問いの答えは本文の中にある。

(4) 授業の立案と評価 (8 項目)

56. 生徒は教えたことはすべて理解している。

58. 知識は教師が与えるものである。

59. 授業の主役は教師である。

61. 授業案には予定された教師の言動を書けばよい。

62. 授業案は毎回あらためて書く必要はない。

63. 授業を観察するときは教師の言動に焦点を当てればよい。

71. テストの点数が上がった生徒は努力した生徒である。

74. 10点を取った生徒は9点を取った生徒よりも実力がある。

### 3.2 考察

領域ごとに授業効果があった項目数にばらつきがみられる。ビリーフテストにおいて、どの項目をどの領域に入れるかは判断の難しいところであり、複数の領域にまたがって該当する項目もあることが一因である。

また、ビリーフ修正は(1)個人により既存ビリーフが異なること、(2)ビリーフの種類により修正しやすいものとしにくいものがあること、(3)処遇タスクにより修正を促すものと促さないものがあること等々、複数の要因が潜んでいるので一元的な説明は難しい(島田, 2002b: 21)。

しかし、本研究の結果には、表2が示すように、島田(1996)、島田(2002b)に共通する項目がいくつか観察される。<sup>4</sup>たとえば、「誤りはすべて訂正すべきである(項目28)」という項目は3つの研究に共通して観察されている。



# 英語学習・指導に関するビリーフの修正

表 2：ビリーフ修正が観察された共通項目

2003	1	2	4	7	9	13	16	18	21	24	25	26	28	19	34	60
1996	/	-	+	-	+	+	+	/	/	/	/	/	+	/	/	/
2002b	/	-	-	/	-	-	+	/	/	/	+	/	+	/	/	/

+ 共通する回答の観察可；- 観察不可；/ 該当なし

表 2：ビリーフ修正が観察された共通項目（つづき）

2003	42	43	50	56	58	59	61	62	63	71	74
1996	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
2002b	/	+	+	/	/	/	/	/	/	/	/

+ 共通する回答の観察可；- 観察不可；/ 該当なし

## 注

- 1 本稿は、第33回中部地区英語教育学会岐阜大会（2003年6月28日；岐阜大会）における口頭発表を修正・加筆したものである。
- 2 教員職員免許法改定にともない、本学では「英語科教育法Ⅱ」は必ずしも履修する必要がなくなったので、2集団の被験者数にもばらつきがみられる。ただし、中学校教諭1種普通免許状を申請する場合は、本学では「英語科教育法Ⅰ」だけでなく「英語科教育法Ⅱ」の単位修得が必要になる。また、「英語科教育法Ⅰ」を受講した者には、継続して「英語科教育法Ⅱ」を受講するよう指導している。
- 3 次の4項目には、有意差が観察されているが、授業目的から判断すると授業効果が現れていない（むしろ逆効果）と解釈される。
  3. 生徒の誤りは日本語の影響による。
  45. 英語を聞きときは文字を見せるべきでない。
  54. 作文では文法的正確さを重視すべきである。
  73. 英語力は4技能の合計点である。

項目3に関しては、授業目的は、言語学習は母語の干渉よりも創造的構築によるということに気づかせることにあった。しかし、実際の授業では、中間

言語の発話の生成過程を分析させるタスクの中に母語による干渉と解釈すべき例があったので、このような結果になったのであろうと考える。島田（1996）でも同様の結果を得た。

- 4 3つの研究において、ビリーフテストは改訂の際に大幅な項目の入れ替えを行っているので、共通項目が必ずしもあるとは限らない。特に1996年版は、授業範囲の関係で英語指導に関する項目が少ない。さらに、調査方法が異なり、島田（1996）は平均点に有意差があった項目、島田（2002b）は内省レポートによる報告で2回以上の出現頻度のある項目に授業効果があったと判断している。

#### 参 考 文 献

- Cabaroglu, N. and J. Roberts. 2000. Developing in Student Teachers' Pre-existing Beliefs during a 1-year PGCE Programme. *System* 28: 387-402.
- Tillema, H. 1998. Stability and Change in Student Teachers' Beliefs about Teaching. *Teachers and Teaching: theory and practice* 4: 217-228.
- 島田勝正 1996. 「『英語科教育法』受講生の英語学習・英語教授に対する意識変化」『中部地区英語教育学会紀要』26:35-40.
- 2002a. 「ビリーフテスト：学習と指導の相関」『中部地区英語教育学会紀要』31:15-20.
- 2002b. 「英語学習・指導に関するビリーフ修正の質的分析」『桃山学院大学総合研究所紀要』28:17-24.

# **Beliefs Modification in English Language Learning and Teaching: A Cross-sectional Study of the Effect of English Language Teaching Methodology I Classes**

**SHIMADA, Katsumasa**

The purpose of the present study is to investigate what beliefs concerning teaching of English as a foreign language changed during a one-year pre-service teacher training course.

Thirty-five students who had just begun studying Teaching English as a Foreign Language and 15 students who had just finished a one-year basic course were given a 75-item questionnaire. This questionnaire was designed to determine the extent to which they agreed with the statements of the beliefs concerning English language learning and teaching, and the mean scores were compared.

The results show that there were significant differences between the two groups in 27 out of 75 items. The items dealt with beliefs concerning second language acquisition and grammar teaching, teaching communication, teaching four skills, and lesson planning and evaluation.

The results were compared with a series of studies conducted by the author (Shimada, 1996; 2002b), and there were a number of common items that could be observed in the three studies.